

# 翻訳女性遺族訪ね交流

米NPO代表 ジャガードさん 「家族思いの人だった」

太平洋戦争の激戦地、ソロモン諸島のガダルカナル島で戦死した河津町出身の陸軍将校の日記が英訳されて今も米国に残る。今夏、日本語に訳し最期の様子を明らかにした米国在住の女性が29日、同町見高の遺族宅を訪れて、翻訳の経緯を説明し交流した。

(下田支社 福島安世)

おさん「死亡日、経緯分かり感謝」

女性は日本兵の遺留品の返還活動を支援するイリノイ州のNPO法人キセキ遺留品返還プロジェクトの代表、

ジャガード千津子さん。6月にネットで販売されている日本人将校の日記の英訳版を見つけた、調べたところ中

村完(たもつ)中尉(当時少尉、享年24)の日記で、戦場で米軍が入り、戦場が手書きの原稿が保管されていた。日記は1942年9月19日から43年1月7日まで毎日、つづられていた。さらに手書きの翻訳版には1月8日付の記述があった。同日朝、食料を調達しようとしていて射殺されたこと、日記が防水カバーに包まれた状態で遺体から見つかり、米情報部が翻訳したことも記されている。ジャガードさんは翻訳者による追記と推定した。



中村中尉の遺影を前に日記の翻訳経緯をおいの聡さん(左)に説明するジャガードさん＝河津町見高

つてをたどって中村中尉の遺族を探し、おいの聡さん(83)に自らの訳した日記を今夏、送った。来日に合わせて聡さんの自宅を訪れた。

調査を進めると、ミシガン大とテネシー大にタイプ打ちの英語版があり、ミシガン大には手書きの翻訳原稿が保管されていた。日記は1942年9月19日から43年1月7日まで毎日、つづられていた。さらに手書きの翻訳版には1月8日付の記述があった。同日朝、食料を調達しようとしていて射殺されたこと、日記が防水カバーに包まれた状態で遺体から見つかり、米情報部が翻訳したことも記されている。ジャガードさんは翻訳者による追記と推定した。

戦地に赴く心情  
深刻な食料不足  
日本への思い  
日記には戦地に赴く

ジャガードさんの調査と翻訳により叔父の死亡日と経緯が明らかになり、聡さんは「おかげで新しい事実が伝わった。感謝したい」

中村家を継いだ聡さんのもとには64年に米国の作家から送られ、和訳された中村中尉の日記が残る。ジャガードさんは60年前にも日記が送られていたことに驚きつつ、中村中尉の日記を見つけた経緯を説明した。

心算や移動の船で小説を読んだこと、ガダルカナル島で食料不足が深刻になっていく様子、部下や自分の罹患(りかん)、月夜に波の音を聞き日本を思い出したことなどが記されていた。ジャガードさんは手書きの翻訳版の複写を見せ「訳しながら自分もガダルカナル島を歩いているような感じがした。家族思い、部下思いの人で文学青年だと思った。若い命を奪われて本当に残念だった」としのんだ。

と話した。聡さんの妻きな江さん(79)は、日記にも出てくるおはぎを手作りしてジャガードさんをもてなした。